

# TOEIC Bridge テストの活用—導入結果を踏まえて

鈴木 元子  
美濃部 京子  
Mark D. Sheehan  
杉浦 香織

# TOEIC Bridge テストの活用—導入結果を踏まえて

## Positive effects of implementing the TOEIC Bridge Test for university-level English language learners

鈴木 元子

文化政策学部国際文化学科

Motoko SUZUKI

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

美濃部京子

文化政策学部国際文化学科

Kyoko MINOBE

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

Mark D. Sheehan

文化政策学部国際文化学科

Mark D. SHEEHAN

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

杉浦香織

文化政策学部国際文化学科

Kaori SUGIURA

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

第1章では、TOEFLテスト、TOEICテスト、TOEIC Bridge テストの相違点から始まり、日本人に今本当に必要な英語力とは何かという最新の議論、および他大学における検定試験活用のユニークな事例など、日本の大学における英語教育の背景について概観した。第2章では、4月に本学でTOEIC Bridge テストによりクラス編成した「英語上級Ⅱ・Ⅳ」の結果について学問的に検証した。第3章では、年に4回実施しているTOEIC学内団体受験と英語の授業を連携させるべく独自に開発した「SUACオンラインTOEICシステム」について記述した。ウェブ上の練習問題を教室外で2サイクル自学し、TOEICを受験することで、ボーナス点が成績に加算される仕組みである。第4章では、国際文化学科の新入生の「英語コミュニケーションⅡ・Ⅳ」のクラス編成をTOEIC Bridgeテストで行ったが、その結果分析と学生たちからのフィードバックの分析、および今後の課題について記した。

This paper provides background information on the TOEFL, TOEIC, and TOEIC Bridge tests and their roles in Japan. Explanations of the tests are followed by an example of TOEIC Bridge test implementation at Shizuoka University of Art and Culture (SUAC) for English course streaming. Test data was used to sort students into introductory and upper-level English reading and writing courses. After an analysis of the data, a description is given on the cooperative effort by full- and part-time instructors at SUAC to implement common TOEIC homework and extra credit assignments to improve TOEIC scores. Details of the online system used to support this program are also provided. Student data reported from the SUAC TOEIC Institutional Testing Program (ITP) reflects the program's progress. To conclude this study on the implementation of the TOEIC Bridge test at SUAC, course streaming and the online TOEIC program and system, survey data from SUAC's introductory reading and writing courses is presented. Students enrolled in reading and writing courses in the Department of International Culture were surveyed; results were analyzed along with TOEIC Bridge scores to provide English instructors with insights into better ways to support the needs of language learners.

### はじめに

日本人と英語の関係について、同時通訳者の草分けの一人、鳥飼玖美子氏は「気になるけれど憎らしい存在。愛憎半ばした相手。仲良くすれば得すると思うのだが、何となく好きになれない存在。憧れはあるのだけれど、一緒にいると落ち着かない、苦手な相手」<sup>1</sup>と書いていて、なかなか的を射ている。大学という教育現場で、はりきって英語で英語の授業をしようとする、面白がってのってくる学生と、シラッとした感じで、「英語なんてしゃべりたくないのに、しゃべらせるつもり？（この日本で、友達の前で…）」といったオーラを出している学生もいて、自分の前にいる日本人が二分されていくようである。

本稿「TOEIC Bridge テストの活用—導入結果を踏まえて」は論文であるが、大学の研究紀要論文なので、読者層に教職員や学生、地域の市民も念頭において執筆してみた。TOEFLテストとTOEICテストの相違点（目的や内容など）から筆を起し、TOEICを本学（静岡文化芸術大学、SUAC）でどのように英語教育に活用していくべきかを、今年度クラス編成のために一部導入した

「TOEIC Bridgeテスト」（以下、「TOEIC Bridge」と記す）を中心に論述していく。他大学での取り組みを紹介して、日本の大学の英語教育の潮流に身を置きつつ、本学独自のTOEICサポートシステムの実践例とともに、TOEIC Bridgeのプレイメントテストとしての活用について、学問的に考察し、問題点や課題を明らかにして、次のステップに繋げていきたい。

### 第1章 TOEFL・TOEIC・TOEIC Bridge

#### 1-1-1 TOEFL（トーフル）

1964年（昭和39年）から実施されているTOEFLの方から先に見ていきたい。TOEFLは、“Test of English as a Foreign Language”の頭文字をとり、TOEFLと書いて「トーフル」と読む（「トッフル」と発音する者もいる）。「外国語としての英語のテスト」という名称からも分かるように、非英語圏の出身者のみを対象としており、それはつまり英語を母語とする人は対象にしていないということである。とりわけ、あまり知られていないのは、その得点が相対評価の偏差値のようなもので出されているという点

である。テストの目的も、北米の大学や大学院に入学して、英語での授業についていけるかどうかをみるためのものである。具体的には英語での講義を理解し、分厚い教科書や課題の文献を読みこなし、学期中に幾つも提出しなければならないターム・ペーパー（アカデミック・エッセイ）を書く英語力があるかどうかを判定する試験である。

テスト形式については、日本では2006年よりTOEFL iBTが開始された。iBTとは「Internet-Based Testing」の略称で、「アイビーティー」と呼ばれるコンピュータによる試験である。（日本では紙版のPBTはすでに廃止された。）リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングの4部から構成され、試験時間は約4時間で、点数は最低点が0点、最高点が120点である。リーディングは700～800語の学術的な英文で、アカデミックな専門用語を多く含むものばかりである。リスニングも大学の講義に出てくるような学術的な内容である。

アメリカに1947年に設立された公共教育機関のETS (Educational Testing Service)<sup>11</sup>が実施しているが、これは世界最大のテスト作成機関といえる。TOEFLのインターネットのホームページはアメリカ本国で、URLは<http://www.ets.org/toefl> である。（日本の窓口である国際教育交換協議会〔CIEE ETS〕の日本公式サイトは、<http://www.cieej.or.jp/toefl> である。）

アメリカのTOEFLの公式ホームページを開いてみると（2010年9月現在）、TOEFLには二種類のテストがあり、TOEFL iBT (administered in an internet-based format) というインターネットによるテストと、TOEFL PBT (administered in a paper-based format) という紙版がある。iBTの方は、世界中の4500のセンターで、年に30～40回実施されており、PBTの方は、インターネットが利用できない地域においてのみ、年に6回実施されている。「国/ロケーション」というところに、「Japan」を入れると都市名（県名）、受験料、受験日が出てくる。それを見ると、日本ではiBTしか行われていないことが分かる。「TOEFLで500点」などと言っていた時代ははるか昔のことになってしまった。スコア換算表によると、PBT（紙版）の500点は、今のiBT（インターネット版）では61点である。受験地Shizuoka（シズオカ）でも「インターネットによるテストのみ」しか受験できない。受験

料は200ドル、受験日は毎月4、5回ある。あとは、各自がインターネットの画面上で申込を進めていく。TOEFL iBTの英語のレベルは、中級レベル（Intermediate）から上級レベル（Advanced）になっている。

TOEFLは、アメリカの大学に入学してから英語での授業についていけない学生を排除し、逆に十分についていける英語力がありながら、付属の英語センター等で無用な英語学習に時間を費やすことのないように、英語能力の習熟度を測定するのがその目的である<sup>12</sup>ということを再度強調しておきたい。そこで、留学を目指している学生には大いに受験してほしいが、単に英語力を測るためだけであるとすれば、受験料の高さや試験時間の長さ等から決して使い勝手が良いとはいえない。

### 1-1-2 TOEIC（トイーック）

TOEIC（トイーック）は、Test of English for International Communication の頭文字をとったもので、英語を母語としない者を対象にした、英語によるコミュニケーション能力を評価する世界共通のテストである。1979年（昭和54年）に日本経済団体連合会と通商産業省（当時）の要請に応じて、米国ETSが開発した。日本におけるTOEICの実施・運営は、(財)国際ビジネスコミュニケーション協会が行っている。試験は約90カ国で実施され、年間延べ約500万人が受験している。2009年度の日本での受験者数は約168万人である。

試験は、リスニング100問（制限時間は45分）とリーディング100問（制限時間75分）の計200問からなる。スコアは、10点から990点までのスコアで評価されるが、これらは素点による絶対評価ではなく、Equatingと呼ばれる方式で算出されている。すなわち、「このスコアは、常に評価基準を一定に保つために統計処理が行われ、能力に変化がない限りスコアも一定に保たれている点が大きな特長」<sup>13</sup>なのである。その国独自の文化的背景や言い回しを知らなければ解答できないような問題は排除されていて、テストは身近な内容からビジネスまで幅広く、どれだけ英語でコミュニケーションができるかが測定される。

国際ビジネスコミュニケーション協会が公表するTOEICスコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表は次の通りである。

| レベル | TOEICスコア | 評価  |
|-----|----------|---|
| A   | 860点以上   | ノン・ネイティブとして十分なコミュニケーションができる。              |
| B   | 730～855点 | どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている。          |
| C   | 470～725点 | 日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる。 |
| D   | 220～465点 | 通常会話で最低限のコミュニケーションができる。                   |

本学も開学当初からTOEICテストの採用学校として、「TOEIC学内団体受験」<sup>v</sup>を実施してきた（就職室担当）。現在では年に4回（5月、7月、10月、12月）、土曜日にTOEICテストを実施している。本学がTOEIC賛助会員になっているため、公開テストの受験料が5,985円であるところ、本学で受験すると半額の3,000円で受験できる。

最近、非英語圏では、社員の採用や社員教育、また人事評価等にTOEICのスコアが用いられている。大学生の英語運用能力の判定のためにも活用されている。

### 1-1-3 TOEIC Bridge (ブリッジ)

国際ビジネスコミュニケーション協会のHPによれば、TOEIC Bridgeは「TOEICテストへの架け橋という意味を込めて、初級学習者向けに基礎的なコミュニケーション英語能力を評価するために開発された世界共通のテスト」である。スコア表示による評価方法、信頼性の高いモノサシ機能など、TOEICの特徴を備えつつ、初・中級レベルの英語能力測定に照準を合わせて設計されたテストがTOEIC Bridgeである。2001年11月から現在（2010年）までに世界約35カ国で実施されており、日本では個人による受験のほか2009年度には約500の企業・団体・学校などで採用されている。

受験者数に関しては、2001年度は「IPテスト」（団体特別受験制度：Institutional Program）1,600人、および「公開テスト」（国際ビジネスコミュニケーション協会の定めた日時・場所で受験するテスト）900人で、合計2,500人であった。それが、2009年度（2009年4月～2010年3月）には、IPテスト194,000人、公開テスト4,000人で、合計198,000人と、9年間で約80倍に増えているのは画期的である<sup>vi</sup>。

TOEIC Bridgeの試験時間と問題数はTOEICテストの半分に設計されている。問題はリスニング（25分間で50問）と、リーディング（35分間で50問）からなり、1時間で100問に答える。スコアはリスニング10点～90点、リーディング10点～90点、トータル20点～180点の2点刻みで表示する。（本稿第4章の「TOEIC Bridge と TOEICテストのスコア比較表」参照。）

## 1-2 他大学における取り組み

国際化の進展に伴い、日本の大学ではグローバル（地球規模）に活躍できる人材の育成が急務であるが、その能力の一部が英語力であることを否む者は誰もいないだろう。企業でも、英語力のある新入社員を求め、現社員には英語力の向上を強く求めている。

本学では開学以来、コミュニケーションを重視した英語教育を行ってきたが、それに付随して、コンピュータ支援教育の充実、ネイティブ英語教員（常勤・非常勤）の増員、海外語学研修および交流留学の制度化、海外ボランティア組織「ハビタット」やESSの支援、SUACオンラインTOEICシステムの構築などを進めてきた。さらに、カリキュラム改訂など次の議論を始めるためにも、この2節では他大学におけるユニークな事例や取り組みを紹介することにする。

### 1-2-1 プロジェクト英語、およびアジア学生交流会議

創設10周年を迎えた政策情報学部をもつ千葉商科大学では、1・2年次の英語履修者には、7月と12月にTOEIC Bridgeの受験を義務づけている（政策情報学部生929人）。英語科目の内容としてユニークなのは、英語でのプレゼンテーション技能の習得をめざすプロジェクト「英語 I (A)」である。この科目は、自己紹介のような簡単な内容から入り、訪れてみたい国や都市の紹介、海外旅行の計画、日本文化の紹介などのテーマでプレゼンテーションすることを目的としている。前期の最後に、英語での最終プレゼンを学内の放送スタジオで収録して、そのDVDを高校の英語の先生に見せて感想を聞いてくるというのが夏休みの宿題である。加えて、宮崎緑学部長によれば、課外活動として、アジア人学生と世界の様々な問題についてディスカッションするGPAC（Global Partnership of Asian Colleges：アジア学生交流会議）<sup>vii</sup>に参加するように奨励していることである。すなわち、TOEIC Bridgeという試験のみに終わらず、もう一方に実際にコミュニケーションする場を設けてあげることで、英語学習のモチベーション向上の仕組みを作っているのが注目される。

### 1-2-2 卒業時までのTOEIC目標値設定

学生数1,171人の杏林大学外国語学部では、具体的な指標の必要性から、2年次修了までにTOEIC 500点以上を取得するという目標を設定している。さらに、英語学科の学生が英語教員をめざす場合は、「文部科学省が英語教員に備えておくべき英語力として設定したTOEIC 730点」を目標にしている。1年生は入学間もない4月に、TOEIC Bridgeを習熟度別クラス編成のプレイスメントテストとして活用している。卒業時までの目標値は700点以上で、同学部では英語学科生にTOEICの受験を年2回必須としているほか、希望者には新しく始まった「TOEICスピーキング／ライティングテスト」（略：TOEIC SWテスト）を年1回実施している。

### 1-2-3 ユニークな奨励制度

技術者養成の高専でも、TOEIC BridgeからTOEICへとつなげる仕組みをもつ学校がある。総学生数1,065人の大阪府立工業高等専門学校では、まずTOEIC 600点以上の取得者には表彰状と副賞を授与する「TOEIC受験奨励制度」を設けている。また、優遇措置として、TOEIC Bridgeが140点（TOEIC換算で約400点）に達した学生に、TOEICテストを無償で1回受験できる機会を与えている。昨年度の該当者は76人だったそうである。その背景には、高専の学生は大学受験というハードルがない分、英語学習のモチベーションが低いということがある。大阪府立工業高等専門学校の校長は、これからの技術者には技術力に加えて、英語のコミュニケーション力が不可欠であると強調している。

### 1-2-4 卒業要件としてのTOEICスコア

1981年にトヨタ自動車(株)によって設立された豊田工業大学は工業系単科大学として、国際的技術者の育成を目指している。そこで、教育の質を保証する一環として、TOEICスコアを教育課程に全面的に導入している。英語

科目は、一般英語教育と専門英語教育の二本柱にし、後者は英語の専門家でない工業専門の教員が教えている。カリキュラムには、1年次から4年次まで毎学年、両方の英語科目が段階的に並び、卒業までに取得する英語の総単位数も多い。入学時にTOEICテストのプレースメントテストを課すことから始まり、TOEICスコアを1・2年次の英語科目の成績評価に20%組み込むほか、4年次進級要件に350点を設定し、学部の「卒業要件に400点」を定めている。TOEICスコアを卒業要件にする効果は、英語力の底上げが図れるからとのことである。どれほど専門科目の成績が優秀でも、あるいは就職の内定を得ていても、TOEICで400点取れなければ卒業できないというルールにはよし悪しがあるだろう。それでも、導入しているのである。ただし、遅れをとっている学生やあぶなさそうな学生のためには、3年次後期に外部教育機関による「TOEIC特訓コース」を無料で提供するなど、サポート体制にも気を配っている。

### 1-3 日本人がめざす英語力とは

目を世界に転じてみると、英語関連で面白い記事が*Newsweek* (June 21, 2010) に掲載されていた。4ページにわたるその記事には、まるで発音記号で書かれたような、「Glöb・ish」「グロービッシュ」というタイトルが付けられていた。内容は、英国のクィーンズ・イングリッシュから、民主的なアメリカ英語に変化を遂げた英語が、今度は、文法や構造おかまいなしの「超単純化」された(アジア人やイスラム教徒の中東人も使う)「グロービッシュ」(Global + English) になったという大変興味深い記事であった。

また、英語教員の専門誌である『英語教育』では、2009年8月号に「いま日本人に必要な英語力とは」という特集を組んでいた。安田正氏は、英語習得を二つのグループに分けて説明する。1つはひたすらネイティブ(母語話者)の英語を目指して、発音を真似、単語や文章を暗記し続けるグループ。もう1つは、英語を道具とわりきって、発音は母語の訛りをそのまま残し、とにかく「コミュニケーションする」ことを重要視するグループ。これまでの日本の英語教育は前者であり、後者の代表格がインドであるという。(前述の*Newsweek*の「Glöb・ish」に紹介されている1つの例も、アカデミー賞8部門に輝く、インドを舞台にした映画『スラムドッグ\$ミリオネア』の中で話されているインド人の英語であった。) 安田氏は、大学生にとっては専門の勉強や、ビジネスパーソンにとっては仕事で多忙をきわめるときに、莫大な時間を前者型英語習得に費やすことは不可能で、それよりも、「英語を道具としてわりきる」英語習得方法に、そろそろ日本人もシフトしていくべきではないかと主張している<sup>14)</sup>。

最後に、全く別の角度からの意見も紹介しておきたい。東京大学准教授の斎藤兆史氏は、「英語能力試験依存症」や「母語話者至上主義」に警鐘を鳴らす。彼の英語教育時評には額かされる部分があった。「きわめて抽象的な母語能力が100パーセントの能力として設定されており、学習者の能力は、どこまでそこに近づいたかという基準で判断される」という構図が検定能力試験そのものの中に既に据えられているからある。これでは、実際の言語運用にお

いてどれほど秀でていても、英語「非」母語話者はいくらがんばっても英語母語話者にはかなわないと「裁かれる運命にある」ことになってしまう。斎藤氏は、新高等学校指導要領の「授業は英語で行うことを基本とする」(第3款の4)を無謀な提案と見なし、「大学入学後、知的世界での活動を求められる、日本語を母語とする人材には、英語学習における訳読という手続きを経験してきて欲しい」という東京大学教養学部同僚の意見も紹介している。

このように、他大学の様々な実践例や世界の潮流、さらには行き過ぎに対する懸念等について記してきたが、次章では本学でTOEIC Bridge テストをプレースメントテストとして実施した2年次クラスの結果を分析することにする。

## 第2章 言語カリキュラムの体系的枠組を考慮した習熟度別クラス編成を目指して：「英語上級Ⅱ・Ⅳ」の事例をもとに

### 2-1 本章の目的

本章では、まず、2010年度の「英語上級Ⅱ」(テーマ：時事英語を読む力の向上、履修者総数：69人(内3年生2人、2年生67人)、クラス数：4クラス→1クラス17、18人の少人数制)における、TOEIC Bridgeのスコア(成績)結果による習熟度別クラス編成(上位1クラス、中位3クラス)が妥当なものであったのかどうか、統計分析を行うことにより検証する。次に、数年先に予定されているカリキュラム改訂に向けて、英語教育をより体系的にしていくために、学生の習熟度に応じた授業目的・授業内容や教育方法・学生のニーズ(Brown, 1996, 2005)といった視点を取り入れたカリキュラム開発の必要性について述べていきたい。

### 2-2 「英語上級Ⅱ(前期)・Ⅳ(後期)」のクラス編成方法の変化

#### 2-2-1 2009年度と2010年度のクラス編成方法の相違

「英語上級Ⅱ・Ⅳ」は、2年次開講のリーディング(上級)に焦点をおいた科目である。1年次の「英語コミュニケーションⅡ・Ⅳ」におけるリーディングの基礎レベルより難易度が高くなる。2010年度は、前期に「英語上級Ⅱ」(時事英語)、後期に「英語上級Ⅳ」(原書講読：学術英語)が開講され、専任教員3名と非常勤講師1名が担当しているが、4名とも日本人である。本科目における習熟度別クラス編成は本年度が初めてではない。昨年度までは、1年次に受験したTOEICのスコア(自己申告)と本人の希望(上位クラスと普通クラスのどちらの授業を取りたいか)をもとに、4クラスを2レベルに分けた。しかし、TOEICの受験時期の相違、英検の取得「級」のTOEICへの換算、また、TOEICや英検の未受験者がいるという実情から、学生の英語力を正確に反映したクラス編成を行うことができないという欠点が生じていた。本年度は、科目履修者に定められた日時に一斉にTOEIC Bridgeを受けてもらい、その得点をもとにクラス編成を行ったために、学生の実力をこれ

までよりも正確に反映したクラス編成が可能になった。ただし、習熟度を「A, B, C, D」と4段階に輪切りにしたクラス編成ではなく、あくまで、もっとも習熟度の高い学生を1クラスに集めた「A, B, B, B」(Aクラスが1クラスとBクラスが3クラス)という編成にした。

2-2-2 2010年度に新しく試みたクラス編成

(1) TOEIC Bridgeの素点からみるクラス編成の整合性  
TOEIC Bridgeの素点をもとに、英語習熟度が高いレベル(上位)1クラス、それに続く習熟度レベル(中位)3クラスの2段階の水準でクラス編成を行った。表1は、「英語上級Ⅱ」の習熟度別クラスにおけるTOEIC Bridge 受験結果(リーディングとリスニング合計)の基本統計量を示している。全体の平均値は147.79点(SD:11.42, n=69)である。TOEICテストのスコアに換算すると

470点(TOEIC Bridge, 2009)に近い得点となる。さて、上位クラスと中位クラスの平均点から分かるように、両者間に統計的に有意な大差があることが明瞭なので、プレイメントテストとしての基本的な役割(学習者が適切なレベルのクラスに配置される)を果たしていることが了解される。その確認のために、習熟度レベルを独立変数、テスト素点を従属変数として1元配置分散分析を行った。その結果、習熟度レベルの要因に有意な差がみられ(F(3,66)=14.6, p<.01)、その後のBonferroniの多重比較によると、上位と中位3クラスのそれぞれにおいても有意差がみられた(p<.05)。また、中位3クラス間においては有意差が観察されなかったことから、3クラス間の学生の英語力は、統計上、均等であるといえる。以上により、今年度のクラス編成は、ある程度整合性があったと検証することができた。

表1 「英語上級Ⅱ」習熟度別クラスにおけるTOEIC Bridge 受験結果の基本統計量

| クラス      | A (上位)  | B (中位1) | B (中位2) | B (中位3) | 全体     |
|----------|---------|---------|---------|---------|--------|
| 人数       | 17      | 18      | 18      | 17      | 69     |
| 最高点      | 170     | 158     | 158     | 164*    | 170    |
| 最低点      | 154     | 130     | 132     | 114     | 114    |
| 平均点      | 160.353 | 143.444 | 144.889 | 141.50  | 147.79 |
| 標準偏差(SD) | 5.159   | 8.226   | 8.380   | 11.62   | 11.42  |

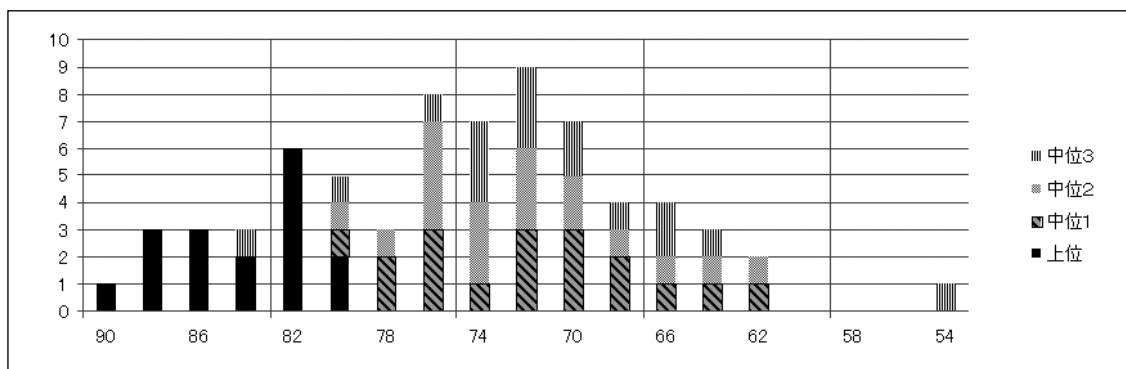
[註]\*クラス編成においては、この科目がリーディングの授業であるため、リーディングの得点を考慮することにし、TOEIC Bridgeのリーディング・セクションで80点以上(履修者平均74点)、総合スコア(リーディングおよびリスニング・セクションの総計点)が154点以上の学生を上位グループに配置した。なお、本学の時間割というその他の問題で、すなわち、学生の同時限における履修科目重複の関係から、本来上位のクラスに所属するべき学生が、B(中位3)のクラスに若干名移動したために、B(中位3)のクラスの最高得点が、他の中位クラスに比べて高めの164点になっている。

(2) クラス編成の課題

前出の表1において、TOEIC Bridgeスコア(平均点)の標準偏差を比較した場合、中位3のクラスにおける数値が他に比べて大きいことから(表1中位3 SD:11.62)、グループ内での英語力のばらつきの度合いが大きいことが分かる。考えられる理由の1つは、表1の註に述べておいた。また、中位1・中位2の両クラスにおける標準偏差も、

上位のクラスの標準偏差と比較して大きいことが分かる(上位SD:5.159、中位1SD:8.226、中位2SD:8.38)。中位クラス内で、学習者の英語力は同一と見なしてはいるものの、英語力の差が小さくはないことが分かる。さらに、中位クラスのリーディング得点の分布図(図1)と平均点を見たところ、平均点が71点(全国平均60.9点)で、学生は主に70点台に分布しているが、同時に50点から

図1 クラスごとにおけるリーディング得点の分布



(人数/得点)

[註] 上位:(平均84点)、中位1:(平均71点)、中位2:(平均71点)、中位3:(平均71点)

60点台の学生も各クラスに5名前後存在することが分かる。以上により、中位レベルを3クラス編成するのではなく、より英語の基礎力を固めるクラスを設けることも、今後検討する必要があるかもしれない。

2-3 授業目標と授業内容・方法と学生のニーズ

2-3-1 授業目標と授業内容・方法の現状

2010年度、「英語上級Ⅱ」の講義内容は、どのクラスも「時事英語」と決め、目標はクラスの習熟度レベルを考慮に入れて各教員が設定した（「授業の目標」例：Students will be able to improve their reading speed and reading strategies）。教材として、Aクラスでは英文雑誌のNewsweekを、Bクラスでは大学生が興味・関心をもつようなトピックを集めた語学テキスト、あるいは、比較的やさしく書かれた英字新聞などが使用された。担当教員4名の授業は、その授業方法に多少の差はあるものの、リーディングに焦点をおきながら、そのほかの技能（リスニング、スピーキング〈プレゼン〉、ライティング、語彙など）も織り交ぜた授業であった。共通の課外学習として、すべての学生がオンラインTOEICシステムによる練習問題を行うように指導され、その課題は成績の一部に組み込まれた。また、学期中にTOEICを受験して450点以上取得した学生には、5%のボーナス点が成績に加算された。

2-3-2 目標と授業内容・方法の課題

上記で述べたように、現在本学では、教員間でその授業方法、教材、課題において緩やかな共通性を保ちながら、任意な形式で授業を実施している。今後、学生の英語力をより効果的に伸張させるためには、プレイメントテストによる習熟度別クラスの編成に加え、より体系立ったカリキュラムのもとで英語教育を行う必要があるといえよう。そのためには、全クラス共通、同一習熟度クラスにおいてより明確な授業目標の設定、目標達成のための授業内容や方法を、学生の学力や学生・教員のニーズを考慮しながら、検討し、決定していくことが必須である。

下記の神奈川大学のように、学部、同一習熟度で授業内容、方法の方向性を明確にしている事例は、今後、本学のカリキュラムを考えるにあたり参考になるであろう。

- 0) 共通の方針：学習者主体のコミュニケーションを目的とするカリキュラム
- 1) 習熟度A: 学生の社会的ニーズ及びアカデミックニーズに対応する。英語を使って学生にとって意義ある知的活動をさせることにより既存の英語力を発展させる。言語そのものや言語の使い方についての知識はすでに習得している習熟度Aのクラスに、process-oriented<sup>x</sup>の教育方法を取り入れる。
- 2) 習熟度B: 基礎力の確認をしつつ実際に学生にとって意義あるコミュニケーション・タスクを行うことにより基礎力を定着させる。履修後の大学生活や職業生活の中で英語学習を継続できるように学習ストラテジーを身につけさせる。基礎的

な文法知識も各言語スキルも十分に定着していない学生がその大半を占める。基礎の確認とskill getting に焦点をあてる（岡崎, 1997）。

このように同一習熟度クラス間で授業内容や方法に大きな差が出ないようにすることや（中鉢, 2009）、共通目標が学生と教師によって明確に認識されることで、その達成に向かい、大学全体で学生の英語力を伸張させていくことができると思う（岡崎, 1997）。

2-3-3 学生のニーズ

下記の図2から図5は、2010年度の英語上級ⅡのあるB（中位）クラスの学生18人を対象に行ったアンケート調査の一部である。

図2は履修の動機・目的、図3は各英語スキルに対する自信の度合い、図4はリーディングにおける困難点、図5は3年次以降の演習（ゼミ）における英語文献読解活動への関心である。紙面上の関係から詳細の記述は省略するが、履修学生の英語学習に対する動機は高く（図2）、演習における英語文献読解に関心のある者も少なからず存在する（図5: 7人/18人中）。また、学習者が弱いと感じている英語スキルがスピーキングと語彙であることが分かる（図3、4）。

図2 履修の動機・目的（複数回答）

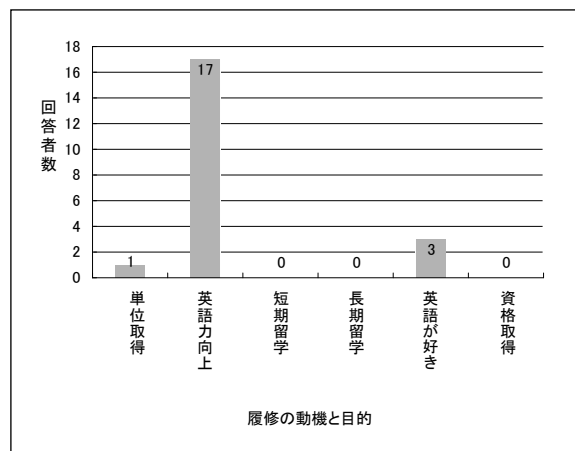


図3 各スキルに対する自信の度合い（最高5—最低1）

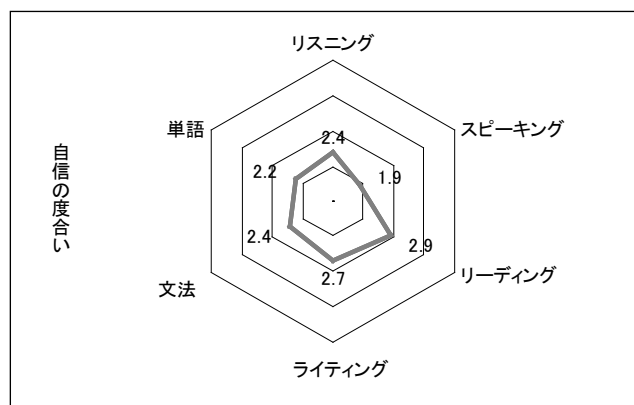


図4 リーディングにおける困難点（自由記述）

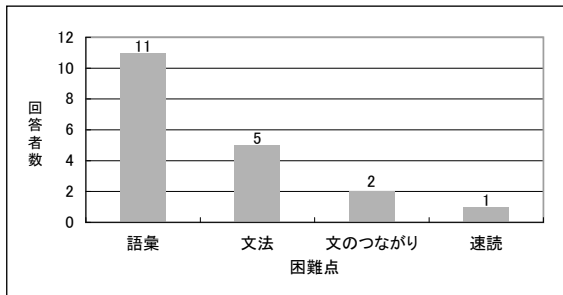
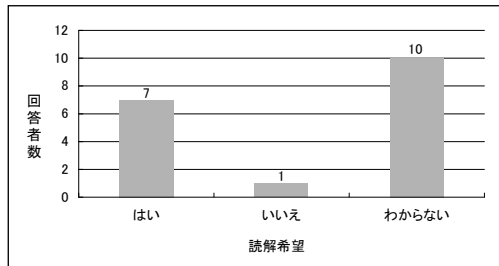


図5 3年次以降の演習での英語文献読解希望



ここでは学生のニーズの一部を示したが、このように学生のニーズとともに教師のニーズ（参照：Sugiura, 2009）を考慮しながら、学科共通の習熟度別における英語教育目標を明らかにしていくと同時に、関連して教育方法の方向性をも定めていくことが大切であろう。

#### 2-4 課題および展望：新カリキュラムにむけて

以上、クラス編成の整合性、授業目的、授業内容や教育方法、学生のニーズの視点から2010度前期のクラス編成について記述してきたが、ここで今後の課題について幾つか述べてみたい。

第一は、プレイスメントテストの実施回数についてである。英語上級の授業は、前期・後期の半年ごとに成績を出す。今年度の習熟度別テストは4月に1回実施したのみであった。学生は、英語力伸張に応じてその実力に応じた目標を目指して学習することが望ましいので、プレイスメントテストの実施が年1回でよいのか、検討する余地がある。しかし、前期終了時に第2回目のプレイスメントテストとしてTOEIC Bridgeを実施した場合、「TOEICのスコア向上」が学生の学習内容、または、教師に求める教授内容に非常に影響力を持つことを見逃してはならない。英語上級のプログラム内容は、前期「時事英語」、後期「原書講読（学術英語）」であり、TOEICの内容に関連したビジネス系のものばかりではない。また、留学に必要なスキルや大学の専門教員が求める英語力はより学術的であるため、TOEIC対策によってつく力やTOEICで測定される力とは必ずしも一致しない。この点も踏まえて、プレイスメントテストの実施回数は慎重に検討していく必要がある。

第二は、成績評価についてである。現状では、習熟度別クラス編成と成績評価の関係を考慮した傾斜評価を行っていないため、A（上位）クラスで優秀な成績を収めた学生と、B（中位）クラスで優秀な成績を収めた学生に同じ評価がつき、英語学力の絶対的な評価がなされていない。成績評価と学生の学習モチベーションの関係や、大学全体として

の成績評価のあり方も考慮しながら、傾斜評価についても検討すべきであろう。

第三に、実際に習熟度別クラス編成にしたことで、英語力やそのモチベーションにどのような効果が見られるのか、データに基づいてその効果を実証していくことが必要であろう。

最後に、前述したように、TOEIC Bridge プレイスメントテストを言語カリキュラムの体系的枠組の中の一部として捉え、その他の要素との相互関係を考慮していくことが、本学の語学プログラム全体をよりよい方向に導く鍵であると考察する。

### 第3章 TOEIC受験を支える「SUACオンラインTOEICシステム」

#### 3-1

前述の通り、TOEIC Bridgeを大学に導入するには、考慮すべき多くの要点がある。高校を卒業し、大学入試に合格した大学レベルの学生は、受験用の暗記学習から離れ、知識と専門技能の修得に焦点を置き始めるべきである。学生や教員の中には、試験準備に重点を置き続けることを良しとしない向きもあるだろう。だが、TOEICに精通し、目標を持ってスコアを上げるべく試験勉強に時間を費やすことは重要である。その理由について深く論じることは本論の目的外となるために言及を避けるが、本学のTOEICシステムを論じる際には常に意識する必要がある。

日本における英語教育の現実として、新規雇用や昇進のときに英語能力を求める企業はTOEICを用いて、その英語能力を評価する。意図しているかどうかに関わらず、この現実と言語指導者と学習者の双方に影響を与える。TOEICは、「バックウォッシュ」または「ウォッシュバック」として知られているものを誘因とし（Chang, 2000）、管理、教育、教育課程における方針に影響を及ぼす可能性がある（Biggs, 1996）。従って、学生や言語指導者にTOEICの点数を上げる必要がある場合、大学のカリキュラムにおいてTOEIC学習を適切に位置づけることが大切である。TOEICはカリキュラム外で実施される民間の試験なので、教育者や管理者は、授業時間から試験準備のための時間を過度に割くことがないように注意しなければならない。さらに、大抵の試験勉強は独学でもできるため、学生たちを支援して進捗状況を監視し、また自学自習を奨励する適切なシステムが重要になる。このように、学生が学習しながらフィードバックできるシステムが不可欠なのである。

TOEIC Bridgeは、学生にTOEICの概念を紹介し、大学での学習開始時における各自の英語レベルを測定するものである。先に報告された通り、このデータはクラス編成および目標設定に有効であるが、さらに重要なのはTOEIC Bridge受験後の支援システムである。

本章では、本学の英語教員が通常の英語学習や、また特にTOEICの学習に関して学生を支援するシステムについて報告する。末尾に、「SUACオンラインTOEICシステム」から得た現在のデータと学生の実績に関する結果を示す。



### 3-2 SUACオンラインTOEICシステム

静岡文化芸術大学は、2010年4月にTOEIC Bridgeを「英語コミュニケーションⅡ・Ⅳ」のプレースメントテストとして導入したが、これまでも数年間にわたってTOEIC支援システムを実施してきた。これから説明する「SUACオンラインTOEICシステム」は、共通の宿題や追加得点、TOEIC団体受験（Institutional Testing Program：ITP）やオンラインTOEIC練習システムについての方針も中に含んでいる。図6は本システムのスクリーンショットである。本システムは、言語教材開発、ウェブサイトおよびデータベース開発の技能に長けた本学および立命館大学の英語教員の協力で制作された大学独自のウェブベースのプログラムである。立命館大学理工学部との深いパートナーシップがなければ、本システムの継続使用はありえない。本学の教員や学生は、立命館大学より多くの技術サポートを得ながら、立命館大学が管理するオンラインTOEIC練習システム開発に貢献し、システムを使用している。さらに、本学の常勤および非常勤英語教員の協力で、カリキュラムにTOEICシステムを組み入れることが可能になった。本学におけるTOEIC練習実施状況を簡単に説明してから、各データを提示したい。

「SUACオンラインTOEICシステム」は、学生に英語の練習機会を与え、TOEICテストの構造に精通するように設計されている。同じ条件下では、受験したことのある学生の方が、受験したことのない学生より通常良い成績を取る（参照：Koelbleitner, Gustavsen, Alberding, 2007）。TOEICの説明、形式、ペースを知ること、結果が異なってくる。学生は、受験の時間配分についても学習することができる。本学のTOEICシステムは、実際のTOEICテストを基にしたリスニング、文法、リーディング練習などの7項目から構成されている。英語の授業科目である「英語コミュニケーションⅠ～Ⅳ」及び「英語上級Ⅰ～Ⅳ」を履修している学生は、共通課題の1つとして、本システムを使用する必要がある。学生は、各学期の最初の月に130問の質問に正解し、翌月に、別の110問の質

問に答えなければならない。この宿題を完了していない学生は、学期末の成績から減点されることになる。これらの宿題は、TOEIC団体受験の試験日に対応するように設定されていて、試験前に学生の学習意欲を喚起することにも一役買っている。試験を受けて、必要最低限以上の点数を取得した熱心な学生には、学期末までにもう一セット練習問題を解答すると、追加得点が与えられる。

これらの共通方針については、常勤および非常勤英語教員で議論・検討し、全教員の同意を得ているために、本プログラムは成功しているといえる。学生は、秀逸なオンライン・システムにアクセスできるだけでなく、英語教員全員が一丸となって、本学における英語カリキュラムのTOEIC学習を支援しているのである。

### 3-3 「SUAC オンラインTOEIC システム」のデータについて

オンラインTOEICシステムのデータベースは、各学期末にリセットされ、各学年の開始時に更新される。このメンテナンスで、ウェブマスターはシステム使用の現在の統計値を保存し、毎年、新入生のデータを入力することができる。図7は、2010年度前期における本システムの統計値を示すスクリーンショットである。2010年度前期には、400人以上の学生が本システムを使用し、過去数年間においても各学期毎に500人ほどの学生が使用している。表2はTOEIC団体受験の平均点・上位点・受験者数を、表3はSUACオンラインTOEICシステムの利用状況を示している。また、英語科目を履修していない学生でも、本システムを使用することができる。実際、上級生は、英語能力を要件とする就職口を得るために、このTOEICテストを受験前の復習として役立てている。共通のTOEICの宿題およびカリキュラム全般の方針に関する詳細情報については、次のURLを参照していただきたい：[http://www.suacletters.com/suacletters/SUAC\\_TOEIC.html](http://www.suacletters.com/suacletters/SUAC_TOEIC.html)。

図6：オンラインTOEICシステム問題例

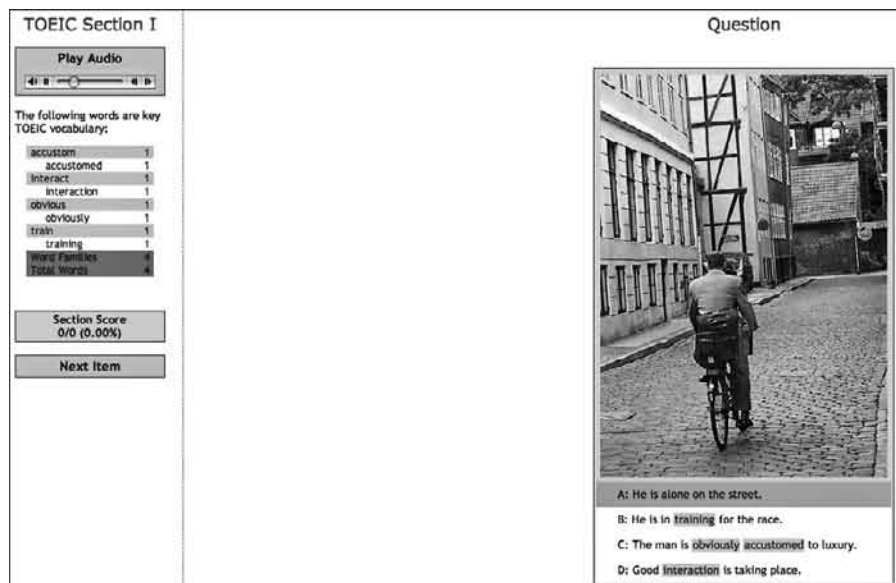


図7：TOEIC システム統計

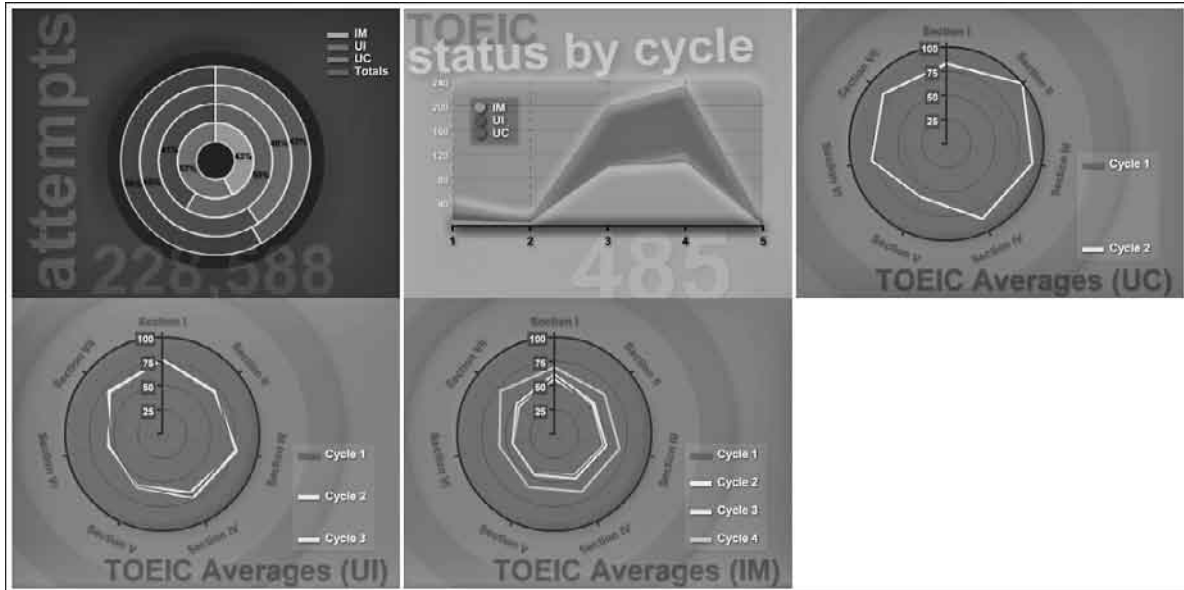


表2：TOEIC団体受験の平均点・上位点・受験者数

| SUAC TOEIC ITP Data |          |           |          |           |
|---------------------|----------|-----------|----------|-----------|
|                     | May 2009 | July 2009 | May 2010 | July 2010 |
| Average             | 507.4 点  | 492.6 点   | 473.4 点  | 471.4 点   |
| High scores         | 830 点    | 855 点     | 775 点    | 820 点     |
|                     | 780 点    | 820 点     | 760 点    | 785 点     |
|                     | 750 点    | 760 点     | 755 点    | 735 点     |
|                     | 745 点    | 755 点     | 750 点    | 725 点     |
| # of Test takers    | 131      | 147       | 169      | 177       |

表3：SUACオンラインTOEICシステムの利用状況

| SUAC TOEIC System Usage        |             |           |             |
|--------------------------------|-------------|-----------|-------------|
|                                | Spring 2009 | Fall 2009 | Spring 2010 |
| # of students using the system | 528         | 447       | 485         |
| # of questions completed       | 234,816     | 187,959   | 228,588     |

第4章 「英語コミュニケーションⅡ・Ⅳ」(1年次、国際文化学科)のクラス編成

4-1 経過と実施方法など

開学以来、1年次開講のリーディングを中心とする英語科目のクラス編成に関して検討を重ねてきたが、この「英語コミュニケーションⅡ・Ⅳ」が必修科目でないこと、また、入学式・ガイダンス時には様々な行事が詰まっいて、履修するであろう学生だけをまとめて試験をすることの困難さ、試験の採点を短時間で行うことの困難さ、もし外部試験を利用した場合にはその経費をどこから出すのかなどの問題から、習熟度別のクラス編成は行わずに、学籍番号によってクラス分けをしてきた。ところが、TOEIC Bridgeというプレイスメント用の試験ができて、国内の多くの大学で利用し始めているという情報を得、2010年度4月に試行的に国際文化学科の新生(履修希望者のみ)を対象に実施してみることにした。本章では、その実施経過、結果報告、および学生・教員の反応、今後の課題についてまとめた。

TOEIC Bridgeの利点は、まず、試験実施後数日で結果を入手でき、次に、本学で行っている「SUACオンラインTOEICシステム」に学生をつなげていくことができるということ、また、毎年TOEIC Bridgeを実施することで、入学してくる学生の英語力の推移を把握することができるという点にある。加えて、結果をエクセルのデータファイルで入手できることから、その後のクラス分けや統計処理が簡単にできるという利点もある。

試験は新生ガイダンスの2日目の時間を利用し、「英語コミュニケーションⅡ」を受講予定の学生全員に受験するように指示した。実施にあたっての問題点としては、試験時には受講を考えていなかった学生が、TOEIC Bridgeが終わってから、「やはりわたしも英語コミュニケーションⅡを履修したい」と言い出してきた学生が数名いたことである。英語コミュニケーションを受講する・しないにかかわらず、全員に受けさせるような形にした方がよいと思われる。新生の英語力を測るという意味でもその方が適切だろう。また、テストのために受験料(2,100円:賛助会員価格)が必要になるということに抵抗を感じた学生も少なからずいたようである。今後、プレイスメントテストの受験料をどこから出すかについてさらに検討していきたい。

4-2 テスト結果とクラス分け

クラス分けについては、英語がよくできる学生たちのクラスを1クラスとそれ以外の学生たちのクラスを3クラス作ることにしていた。おおよそTOEICで450点以上ぐらいの学生で1クラスを作り、それ以外の学生を3クラスに均等に分けることを予測していたのである。TOEIC Bridge とTOEICテストに関しては、各スコアを比較するための換算表があるので、これを参照していただきたい。

表4 TOEIC Bridge とTOEICテストのスコア比較表<sup>xi</sup>

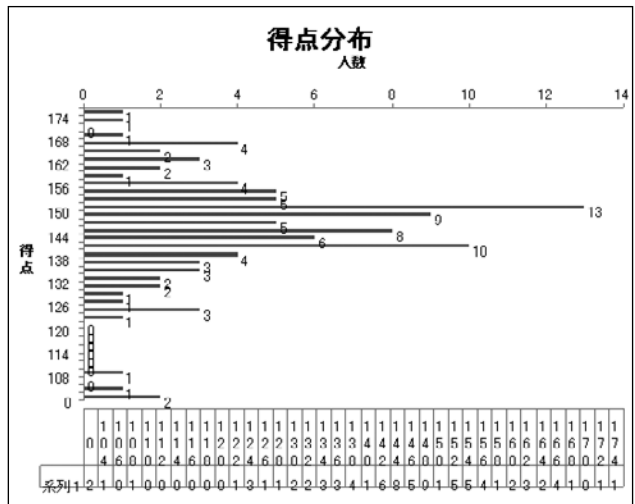
| TOEIC Bridge | TOEICテスト |
|--------------|----------|
| 90           | 230      |
| 100          | 260      |
| 110          | 280      |
| 120          | 310      |
| 130          | 345      |
| 140          | 395      |
| 150          | 470      |
| * <153>      | <500>    |
| 160          | 570      |

(\*ここだけ筆者推定の数字)

実際にTOEIC Bridgeの結果をしてみると、予想よりもはるかに点数が上であった。最高点が174点、最低点が104点、平均点が146点で、これは全国の私大平均、国公立平均を上回るものであった。

表5 TOEIC Bridge 得点分布

| TOEIC Bridge | SUAC 1年生人数 |
|--------------|------------|
| 170~179      | 2          |
| 160~169      | 12         |
| 150~159      | 28         |
| 140~149      | 38         |
| 130~139      | 14         |
| 120~129      | 6          |
| 110~119      | 0          |
| 100~109      | 2          |



全受験者102名中、TOEICの470点にあたるTOEIC Bridge150点以上が42名と、予想していたよりもかなり優秀な学生が多く入学してきたことが分かった。その結果、全体の4分の1を超えない範囲でAクラスのメンバーを決定するという方針に従い、得点154点以上の24名をAクラスに、それ以外の78名(実際には試験を受けなかった学生3名を加えたので81名)をそれ以外の3クラスに振り分けた。Aクラス以外の学生の得点分布をみると、150

点以上が18名、140～149点が38名、130～139点が14名、120～129点が6名、110点以下2名、未受験者3名となっている。そのため、今度は同じBクラスでも学生たちの英語能力が100点台から152点まで開いてしまい、すなわち、普通のTOEICテストに換算すると200点台後半から500点近くまでと、英語能力の差が大きいという結果になった。そこで、Bクラスの上位者とAクラスの下位者とでは、ほとんど英語能力に差はない。150点以上が42名いたので、今年は上位クラスを2クラス作ることもできたかもしれない。

今年は得点分布がかなり上位に固まる形になったが、毎

年どようになるかは試験結果をしてみるまで分からない。今年度は最初によくできるクラス1クラスとそれ以外のクラスに分けるという方針を立てて、それに基づいてクラス編成をしたのだが、今後は毎年試験結果を見てから、Aクラスを幾つ作るかを決めるという形の方がより望ましいであろう。

#### 4-3 クラス編成についてのアンケート

今回、TOEIC Bridgeによるクラス分けは初めてということで、実際に受けた学生にアンケートを実施し、96名から回答を得た。

表6 「英語コミュニケーションⅡ」クラス分けについてのアンケート

|                     |         | A  | B1 | B2 | B3 | 計  |
|---------------------|---------|----|----|----|----|----|
| クラス分けをするのは          | よい      | 17 | 15 | 11 | 19 | 62 |
|                     | よくない    | 3  | 0  | 2  | 0  | 5  |
|                     | どちらでもよい | 2  | 10 | 9  | 7  | 28 |
|                     | 無回答     | 1  |    |    |    | 1  |
| 能力分けによるクラスで授業を受けてみて | よかった    | 17 | 10 | 7  | 15 | 49 |
|                     | よくなかった  | 3  | 3  | 3  | 4  | 13 |
|                     | どちらでもよい | 3  | 12 | 12 | 7  | 34 |

まず、テストによってクラス編成することの是非については、①「よい」-62名(64.58%)、②「よくない」-5名(5.21%)、③「どちらでもよい」-28名(29.17%)、無回答1名と、6割以上の学生がよいと認めていることが分かった。また、Aクラスの学生については23名中17名(73.91%)が「よい」と回答しているので、非常に多くの学生がテストによるクラス編成を是認していることになる。

TOEIC Bridgeプレイズメントテストが「よい」理由としては、「レベルに合った授業が受けられる」、「自分のレベルが分かる」、「やる気が出る」などという意見が多かった。「よくない」理由としては、「好きな先生の授業が取れない」、「数点の差で上のクラスに入れなかった」、「下のクラス内のレベル差が大きくなる」などという意見が見られた。また、「どちらでもよい」と答えた学生からはクラス分けの方法そのものについての意見があり、「能力分けが中途半端だった」、「上のクラスだけ作るのではなくて、そのほかにも能力別にしたほうがよい」、「上のクラスばかりレベルが上がる」というような声があった。これについては、今後の課題として検討していきたい。

次に、実際にレベル別のクラスで授業を受けた感想としては、①「よかった」-49名(51.04%)、②「よくなかった」-13名(13.54%)、③「どちらでもよい」-34名(35.42%)と半数以上がよかったと答えているが、ここでも今後の課題につながるような意見が幾つか見られた。

「よかった」理由としては、「課題は大変だったが、英語の能力が上がった気がする」、「レベルの高い環境に身を置くことで英語が上達した」、「みんなのレベルが高くて、もっと頑張ろうと思えた」という意見がAクラスからは寄せられた。一方、それ以外のBクラスからは、「自分

のレベルに合っていた」、「みんな同じぐらいで安心した」、「わかりやすかった」などという声が聞かれた。「よくなかった」理由としては、「話がむずかしくてついていけない時があった」、「高校よりも簡単でゆるかった」など、自分のレベルに合っていないと感じた学生からの意見のほか、「教員によって難易度に差がある」、「クラス内での能力の差が大きすぎた」、「低いクラスは低いで分けてほしい」というクラス分けの方法についての意見も聞かれた。

#### 4-4 今後の課題

1年目のクラス分けの結果を振り返ってみて、問題点としては主に、(1)実施方法について、(2)クラス分けの方法について、(3)授業の内容について、という3つの点から考えることができるだろう。

まず、実施方法については、すでに述べたように、受験の費用の問題がある。クラス編成だけのために費用を払うことに抵抗がある学生もいることから、なんとか大学の経費を計上してもらえないか、その方向性を模索したい。そのことによって、受験対象も英語コミュニケーションを受講する学生だけでなく、新入生全員に受験させることも容易になると考えられる。

次にクラス分けの方法についてであるが、今年はよくできる学生のクラスを1クラス作るということであらかじめ決めておいたのだが、実際には予想以上に高得点の学生が多かったことから、下のクラス内での学生の能力差に対する不満の声が聞かれた。可能であれば、テストの結果によって、クラス編成を柔軟に変えていくのが望ましいと考えられる。ところが、現在は、前年度の12月に次年度のシラバスを提出しなければならぬ都合上、各英語教員の担当クラスや教科書を決定せざるを得ない、というのが実

情である。実際の新入生のレベルに合った授業を行うためには、教材の選定についても十分考慮する必要があるだろう。

そこで、3つ目の授業の内容についてという問題が上がってくる。今回のアンケートでも「先生によってやっている内容が違う」という声がかなり聞かれた。今年度は、シラバスの提出期限の問題もあり、各担当教員が上位クラスを持つか、中低位クラスを持つかだけを決めて、使用テキストについては各教員に任せるといった形をとった。ところが、前述したように、学生の得点によってA・B各クラスのクラス数を決めるということになれば、新学期の授業が始まる直前までクラスで使用するテキストを決められないことになる。この点については、現在英語担当教員の間で議論しているところであるが、まず、クラスごとの到達目標を決め、「英語コミュニケーションⅡ」であれば、リーディング、ライティングを行うという部分は共通にしておいて、その到達目標にしたがって、扱う教材を変えていくというような方向である程度の統一性を持たせることができると考えている。

以上、現在の日本における英語教育の流れ、そして本学における新しい取り組みの結果分析と今後の課題について考察した。

- i 鳥飼玖美子『TOEFL・TOEICと日本人の英語力——資格主義から実力主義へ』講談社、2002年。8ページ。鳥飼玖美子氏は現在、立教大学異文化コミュニケーション研究科教授。
- ii 「ETSの公式ホームページ」(<http://www.ets.org>)
- iii 鳥飼、75ページ。
- iv (<http://www.toEIC.or.jp/toEIC/about/what>)
- v 実施する団体（企業や学校）の都合に合わせて随時実施できるTOEICのことで、IPテスト（Institutional Program）とも呼ばれる。
- vi 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会「TOEIC Bridge DATA & ANALYSIS 2009: 2009年度受験者数と平均スコア」（2010）の資料による。
- vii (<http://www.cuc.ac.jp/gpac>) 現在、ソウル国立大学、台湾国立政治大学、北京大学、ベトナム国立大学、慶応義塾大学、名城大学、千葉商科大学の7大学が加盟している。
- viii 安田正「日本人に本当に必要な英語を目指そう：ビジネス英語研修の現場からの提案」『英語教育』（2009年8月号）、大修館書店。20-21ページ。
- ix 斎藤兆史「英語能力試験依存症、母語話者至上主義、そして訳読について」『英語教育』（2009年8月号）、大修館書店。41ページ。
- x 学習経験のプロセスそのものを目的とした(Nunan, 1988b) 学習方法。例えば、1つのテーマについて資料を読み、視聴覚教材からの情報を得て、それをもとに自分の考えをまとめ発表するといった一連の学習（岡崎、1997）。
- xi リーディング、スピーキング、ライティング、リスニングのように個々のスキルに焦点をあてて学習する方法(Dubin & Olshtain, 1986)。
- xii 参照 (<http://www.toEIC.or.jp>)。

## 参考文献

- Biggs, J.B. (Ed.) (1996). *Testing: To educate or to select? Education in Hong Kong at the Crossroads*. Hong Kong: Hong Kong Educational Publishing Co.
- Brown, J. D.(1996). *Testing in language program*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.
- Brown, J. D.(2005). *Testing in language programs: A comprehensive guide to English language assessment*. New York: McGraw-Hill College.
- Chang, L. (2000). Washback or Backwash: A Review of the Impact of testing on Teaching and Learning. Retrieved from [www.eric.ed.gov](http://www.eric.ed.gov)
- Dubin,F. & Olshtain.E. (1986). *Course Design*. New York: Cambridge University Press.
- Koelbleitner, C., Gustavsen, E., and Mark Alberding. (2007). An Examination of the Proposed Use of the TOEIC at Asia University. *The Center for English Language Education Journal*. Asia University, Japan. Retrieved from, [www.asia-u.ac.jp/cele/cele\\_celejournal.htm](http://www.asia-u.ac.jp/cele/cele_celejournal.htm)
- McCrum, Robert. (2010). "Glöb · ish", *Newsweek* (June 21, 2010).
- Nunan, D. (1988b). *The Learner -Centered Curriculum*. New York: Cambridge University Press.
- Sugiura, K.(2009)."Needs Analysis of EFL Students and Teachers:Towards Making Connection among Academic Reading Class, Seminar Class and Lecture." *SUAC Bulletin*, 10, 11-21.
- TOEIC Bridge(2010).*TOEIC Bridge® DATA & ANALYSIS 2009* [Data file] Retrieved from <http://www.toEIC.or.jp/bridge/data/document.html#a>
- 岡崎万紀子(1997).「コミュニケーション能力育成のための大学英语教育カリキュラム作成」『神奈川大学国際経営論集』12: 143-158.
- 小串雅規(2010).「到達目標をめぐって」『英語教育』（2010年10月号）、大修館書店。
- 斎藤兆史(2009).「英語能力試験依存症、母語話者至上主義、そして訳読について」『英語教育』（2009年8月号）、大修館書店。
- 清水裕子(1998).「英語プログラムとプレイズメント・テスト——2種のテスト結果の分析をもとに——」『立命館経済学』47: 359-273.
- 鳥飼玖美子(2002).『TOEFL・TOEICと日本人の英語力——資格主義から実力主義へ』講談社。
- 中鉢恵一(2009).「FDと英語教育」『南山大学経済論集』73: 116-125.
- 安田正(2009).「日本人に本当に必要な英語を目指そう：ビジネス英語研修の現場からの提案」『英語教育』（2009年8月号）、大修館書店。
- 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会「TOEIC Bridge DATA & ANALYSIS 2009: 2009年度受験者数と平均スコア」(2010)(資料)
- 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 "TOEIC Bridge Newsletter No.17"(July 2010)

## 参考URL：

- 「TOEFL公式ホームページ」<http://www.ets.org/toefl>
- 「CIEE ETS日本公式サイト」<http://www.cieej.or.jp/toefl>
- 「TOEIC 公式ホームページ」<http://www.toEIC.or.jp>